
ドラゴンクエスト? ~ 紡がれし三つの刻（とき） ~

乱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンクエスト？〜紡がれし三つの刻とき〜

【Nコード】

N2139Y

【作者名】

乱

【あらすじ】

この物語は、メインキャラクターなどを他の作品のキャラクターに置き換えています。

主人公役の横島は転生者でも無く、世界移動した訳でも無く、横島というキャラクターを借りて来た訳です。他のキャラクター達も同様です。

キャラクターに合わせたギャグなどはしょっちゅう入る事がありますが話は基本的に原作に沿って進みます。

ちなみにサブタイトルの「三つの刻^{とき}」と言うのはパパス・主人公・勇者の三世代と主人公の幼年期・青年期前半・青年期後半を掛け合わせたつもりです。

それぞれ、一話づつ完成してからアップしようとしてたけど少しづつでもなるべく毎日更新したいなと思ってこういう形にしました。

本作はT I N A M Iにも投稿しています。

Level 1「帰郷・パパスとタダオ」その1（前書き）

横島を主人公に置き換えたDQ？。

そしてピアンカやフローラなども他のキャラに置き換えてます。
パパスなど死んじゃうキャラなどはそのままだけど。

Level 1「帰郷・パパスとタダオ」その1

カッチコッチ、カッチコッチ、カッチコッチ、カッチコッチ、
コツコツコツコツコツコツコツコツコツコツコツコツコツ

その広い部屋には時計の音と、その背中に紋章が刻まれた赤いマントを着けた男がうろつろと歩き回る靴の音だけが響いていた。

「パパス王、お気持ちは分かりますが少し落ち着かれてお座りになつてはいかがですか？」

大臣であろう一人の男が歩き回っている男に語りかける。

「う、うむ。…そうだな」

パパス王と呼ばれた男はそう言うのと玉座に座るが、しばらくすると立ち上がり再びうろつろと歩き回り出す。

そうしていると階段の方から誰かが駆けて来る足音が聞こえて来た。

「パ、パパス様！！ お、お生まれになりました！！」

「何！？ 本当か、バークよ！！」

「はい！！ 早く王妃様の所に」

「う、うむ!!」

そしてパパスはすぐさま階段を駆け上がって行く。

「で、バーク。それでお子は？パパス王のお子は？」

「お喜び下さい大臣様。それはもう立派な……」

パパス王が息を切らせながら出産が終った部屋へと駆け付けると侍女が笑顔で待っていた。

「パパス様、おめでとうございます！本当に可愛い、玉の様な男の子ですよ」

「そ、そうか!! 男の子か!!」

ほぎゃあ、ほぎゃあ、ほぎゃあ、ほぎゃあ、

生まれたばかりの赤ん坊は元気に泣いていて、母親はそんな我が子を愛おしそうに見つめている。

其処に満面の笑みを浮かべたパパスが歩いて来た。

「良く頑張ってくれたな、マーサよ」

「あなた……」

「おお、こんなに元気に泣いて……、

早速だが、この子に名前を付けてやらないとな」

「ええ、そうね」

パパスは顎に手をやり、唸りながら名前を考えている。

「うゝむ、うゝゝむ……、そうだ！！ 良い名が浮かんだぞ。トンヌラ、トンヌラと言うのはどうだ！？」

「…………トンヌラ？」

「どうだ、良い名だろう。はっはっはっはっ！！」

「まあ、ステキな名前！いさまして、かしこそうで……、でも私もこの子の名前を考えていたの。タダオと言うのはどうかしら？」

「そ、そうか……、あまりパツとしない名前だがお前が良いのなら良いと思うぞ」

そしてパパスは我が子を抱き抱えるとその名を呼んだ。

「神から授かった我等の子よ、今日からお前の名はタダオだ！！」

「元気に育ってね、タダオ」

ほぎゃあ、ほぎゃあ、ほぎゃあ、ほぎゃあ、ほぎゃあ、

タダオと名付けられた赤ん坊は二人の腕の中で元気に産声を上げていた。

そして………

ザザーン、ザザーン、

波に揺られる船の中の一室で少年は目を覚ました。

「んゝ、むにやむにや。父ちゃんおはよ」

「おお、起きたかタダオよ。…どうした？変な顔をして」

「何や変な夢を見たんや。ワイがどっかのお城で生まれる夢なんや」
「はっはっは、それはまた変な夢だな」

「そんでな、変なおっさんがワイにトンヌラっちゅーとんでもない
名前を付けようとするんや。…って、どうしたんや父ちゃん？」

「へ、変なおっさん……、とんでもない名前……」 O T L

パパスは四つん這いになって何やら頂垂れていた。

「と、とりあえずこの船旅ももうじき終りだ。今の内に世話になった人達に挨拶をして来なさい」

「分かった。ほな、行って来るわ」

そう言うのとタダオは元気に部屋を飛び出して行った。

そんな後ろ姿を見ながら…

「マーサよ、タダオもあんなに大きくなったぞ。早くお前にも会わせてやりたいな。……しかしタダオの奴、あの話し方がすっかり定着してしまったな。何が気に入ったんだか……」

旅の途中、しばらく滞在した村の独特の話し方だがタダオもようやく喋り出した所と言う事もあって、あの話し方で言葉を覚えてしまったのだった。

その格好は白い布の服の上に紫色のマント、頭には赤い布を覆い被せる様に巻いている。

Level 1「帰郷・パパスとタダオ」その1（後書き）

（、・ω・）やはり子供時代の横島は関西弁の方が似合っているの
で無理やりだけど設定をねじ込みました。

ちなみにタダオが頭に巻いている赤い布は？の主人公を思い浮かべ
てくれると解りやすいです。

子供の頃はバンダナよりそういった感じがいいと思ったもので。

Level 1「帰郷・パパスとタダオ」その2

「お早うや、船長さん」

「おや、タダオくんじゃないか。お早う」

タダオが甲板に出ると船長は船縁から双眼鏡を使って海を監視していた。

「もうじきビスタの港に着く。そうしたらパパスさんやタダオくんともお別れだな、寂しくなるよ」

「そうやな、せっかく船のみんなとも仲良くなれたのに残念や」

寂しそうに俯くタダオの頭を船長は優しく撫でてやる。

「はっはっは、人の縁と言う物はそう容易く切れる物じゃない。何時かまた会えるさ」

「ん〜、むつかしゅうてよく分からんけどまた会えるんならその時が楽しみや」

「そうだな、大きく立派になったタダオくんと再会できるのを楽しみにしてるよ。……ほら、ビスタの港が見えてきた。お父さんと呼んで来なさい」

「うん、分かった」

笑顔で頷くとタダオはパパスを呼ぶ為に駆けて行く。

「…………、大きくなったタダオくんか。きっとその時にはタダオ様と呼ばなくてはならないんだろうな。ねえ、デュムパボス・エル・

ケル・グランバニア国王様」

そつと呟いたその言葉はタダオの耳には届く事無く波の音にかき消された。

「父ちゃん、港が見えて来たで」

「ようやく着いたか、村に帰るのも2年ぶりだな。タダオはまだ小さかったから良く覚えていないだろう」

「何となくなら覚えとるで」

「そうか、ならば早く帰ろう。バークが待ってるぞ」

「うん！」

栈橋の所に着くと船長達が誰かを出迎えをしている様だ。

「船長、誰か乗り込んでくるのか？」

「ああ、パパスさん。この船の持ち主のフォーベシイ様ですよ」

「そうか。ならば乗せてもらったお礼と挨拶をしなければならんな」

そして長い黒髪を靡かせながら一人の男が乗り込んで来た。

「フォーベシイ様、お待ちしておりました」

「ああ、出迎え御苦労さま船長。おや、その人達は？」

「私の古い知り合いで船の護衛代わりに同船していただいた…」

「パパスと申します。この度は貴方の船に乗せていただいて大変助かりました」

「いや、船を護つていただけたんならお互い様ですよ。有り難うございます」

そんな風に二人が握手をしていると紫色の長い髪の小さな女の子が船に乗り込もうとしていた。

「よいしょ、よいしょ」

「おや、ネリネちゃんにはこの入口は高すぎたかな？」

ネリネと呼ばれた女の子が棧橋から船に乗り込もうと四苦八苦している。

「ほれ」

「え？」

タダオはそんな女の子に手を差し伸べてやる。

「つかまりや」

「あ…はい／＼／」

女の子は赤くなりながらもその手を掴み、無事に船に乗り込んだ。

「タダオの奴め……」

「ははは、ネリネちゃん。ちゃんとお礼を言うんだよ」

「は、はい。あ、ありがとう…ございます／＼」

そんな時、もう一人の女の子が乗り込んで来た。

「ちょっとネリネ、それに其処の貧相な奴。さっさとどくワケ、おじさんも邪魔なワケ」

黒髪で色黒の女の子はそう言いながらズカズカと歩いて行くと部屋があるであろう扉の中に入って行く。

「これエミ、失礼じゃないか。すみません、礼儀のなってない娘で」
「いや、お気になさらずに。さあタダオ、我等も行くでしょう」
「分かったで父ちゃん、行こか…ん？」

タダオはパパスの後を追って船を降りようとしたがネリネはタダオの手を掴んだまま離そうとしなかった。

「どうしたんや？」

「あ、あの…、お、おなまえ…。わたし、ネリネ／＼」

ネリネはたどたどしくも、タダオに名前を聞く。

「そうか、自己紹介がまだやったな。ワイの名前はタダオや、よろしくなネリネちゃん」

「う、うん…。またね、タダオ…さま…／＼」

そこまで言つとネリネは顔を真っ赤に染めて逃げる様に走り去った。

「????父ちゃん、ネリネちゃんどうしたんや？」

「パパスさん……、貴方のお子様は……」

「言わないで下さい……。 （これで何本目の旗だ？） 」

やはり此処でも彼は鈍感であつた。

「では世話になつたな、船長。 旅の無事を祈つてるぞ」

「ええ、パパスさん……、さんこそお元気で。 タダオくん、元気でな。 お父さんの様に立派で強い男になるんだぞ」

「うん、船長さんも元気でな。 バイバイや」

そして、棧橋と船を繋いでいた橋は下ろされ、船はゆっくりと離れて行く。

タダオが名残惜しそうに船を見送っているとその後ろ側にあるベランダの様な所からネリネが顔を出し、手を振っていた。

少し寂しそうな顔をしながら……。

「またなー、ネリネちゃーん」

タダオもそんなネリネの姿が見えなくなるまで手を振り続けていた。

Level 1「帰郷・パパスとタダオ」その2（後書き）

ネリネとタダオの話をもつと書き足すべきだったかな？

一応、ネリネの一目ぼれなんだけど…、まあ、ゲーム本編でもあんな感じだったし。

でも、もう少し考えてみるかな？

（、・ω・）ちなみにアンディ役にはピートを用意しています（笑）
。つまり、三人目の嫁候補は別の人でしゅ。

Level 1「帰郷・パパスとタダオ」その3（前書き）

とりあえず、今回で一話目が完成。……はつくしょん！

風邪をひきました。

Level 1「帰郷・パパスとタダオ」その3

「さて、行くとするか。今からなら夕暮れ時にはサンタローズに帰れるだろう」

「うん、はよ行こ。父ちゃん」

ビスタ港から飛び出したタダオはサンタローズへと続く道を元気に駆けだした。

『ピキーーーーッ!!--!』

「わっ!」

サンタローズへと続く街道を駆けているタダオに、草むらの中から魔物が道を塞ぐかのように飛び出して来た。

「な、何や、スライムか」

タダオの目の前には三匹のスライムが並んでいて、その内の一匹がタダオを睨みつけたかと思うと行き成り飛びかかって来る。

「なんのっ!」

各地を旅して来たタダオは今までもモンスターとの戦闘経験はあり、スライム辺りが相手ならそれほど恐れる相手では無かった。

タダオは背中にしよっていたひのきの棒を掴むと一気にスライムに向けて振り下ろした。

『ピギャーッ！！』

タダオの一撃を受けたスライムは地面に落ちると弾け飛び、その場所には赤い宝石が残されていた。

魔王の邪悪な波動を受けたモンスター達はその影響を受けて魔力を結晶化させた宝石をその身に宿している。

倒されて命が尽きても宝石は消える事無くその場に残り、その宝石の価値はモンスターの強さに比例して強力なモンスターであればあるほどその純度を増し、より高額で取引される。

「うゝゝん、2G^{ゴールド}つてところやな」

宝石を日の光に翳しながら鑑定していると他のスライムを退治したパパスがやって来てタダオの頭を撫でる。

「中々見事な一撃だったな、これは将来が楽しみだ」
「へへへ、そやる？ほい、父ちゃん」

少し照れながらもタダオは手に入れた宝石をパパスに渡そうとするが彼はそれに手をかざして止めた。

「それはお前がスライムを倒して手に入れた物だ。お前が持っていないさ」

「ええんか？」

「ああ、無駄遣いはするんじゃないぞ。それに……」

「それに？」

パパスは厳しさと優しさの入り混じった目でタダオを見つめ、頭を撫でながら言葉を続ける。

「その宝石はお前が奪った命である事は忘れてはならん。たとえ相手がモンスターであろうともだ」

「……うん、モンスターだって生きてるんやもんな」

「分かっていればいいんだ」

宝石を袋にしまい込み、タダオとパパスは再び歩き出す。

それから何度かモンスタアの襲撃を受けるが左程大した相手でも無く、タダオも少し怪我をしたりしたがパパスのホイミによって瞬く間に治療される。

『ピキーーーーッ！ー！』

そして何度目かの闘いの時、タダオは襲い掛かって来たスライムをひのきの棒で撃退する。

『ピキヤッ！ー！』

その攻撃は「会心の一撃」と言っべき威力だったが、不思議な事にスライムは何時もの様に弾け飛ぶ事無く、地面に転がり目を回していた。

「ピキヤ〜〜ア……」

「あれ？父ちゃん、なんでコイツは宝石にならんのや？」

「こ、これは……、まさか」

タダオは不思議がり、パパスが呆然としているとスライムは徐に起き上がり、タダオを潤んだ目で見上げている。

「ピイ、ピイ」

「何やコイツ、何か言いたいんか？」

「……きつと、友達になりたいんだろっ」

「ともだち？ワイはコイツをたおそうとしたんやで？」

「きつとタダオに倒された事で悪い心が無くなったんだろっ」

そう言って来るパパスからスライムに目を移すとタダオは笑いながら話しかける。

「じゃあ、ワイといっしょに来るか？」

「ピイーーー、ピッピイーーー」

スライムはそう誘ってくれたタダオに飛び付くと、喜びながら頭の

上に登り甘える様に体を揺らしている。

「（やはりマーサの子供だな。タダオにも同じ力が宿っていたか）
じゃあ名前を付けてやらねばな。トンヌ…」

「ピエールや！！ お前の名前はピエールやで。……父ちゃん、な
にか言ったか？」

「いや……、何でもない……」

パパスはそう言いながら歩き出したがその背中には何処となく哀愁
が漂っていた。

そんなパパスを見つめるピエールは安堵の表情をしていたとか。

そして空が茜色に染まり始めた夕暮れ時、二人と一匹は遂にサンタ
ローズへと辿り着いたのだった。

＝ 冒険の書に記録します ＝

《次回予告》

旅を終えてサンタローズに帰って来たワイと父ちゃん。
そこで昔、よく遊んでもらったレイコ姉ちゃんと再会した。
でも、レイコ姉ちゃんの父ちゃんは病気みたいなんや。
レイコ姉ちゃんの父ちゃんの薬を作る為に薬師のおっちゃんを捜して洞窟を探検や。

次回Level 2「洞窟の中には」

さあ、ドラクエするで!!

Level 1「帰郷・パパスとタダオ」その3（後書き）

と、言う訳でスタートした多重クロスキャラによるドラクエ？ストーリー。

何故、タダオが主人公なのにパパス役がタイジユじゃないのか？それは物語の上でどうしてもパパスの死が免れない為です。

最初はギャグメインで行こうと思ってそれも有りかなと思ってたんですがプロットを立てて行くと結構シリアスな話になって行って、やはり死ぬ役に他のキャラクターを持って来るのは不謹慎かなと言う事で原作通りに父親はパパスのままで行こうとした次第です。

仲間一号のスライムが「スラリン」じゃなくて「ピエール」なのはスライムからナイトへの進化フラグだったりする。

敵モンスターの時は『』ですが、味方モンスターになっただけからは「」と括弧を変えています。

ピエールの声はゴメちゃん風と思っていただければ丁度いいかと。

そしてパパスさんは未だに諦め切れてない様です。

倒されたモンスターがGでゴルドではなく宝石を落とすのはアニメドラクエの「アベル伝説」から持って来た設定です。

ちなみに次回予告で解る様にイメージED曲は「夢を信じて」です。

絵が描ければイメージ画を描くんだけどな。

誰かいないかな〜。

— ω・〜 チラリ

「取扱説明書」(前書き)

少しでも解りやすくなればと書いてみました。

「取扱説明書」

まずは、この物語の世界観から。

・原作にない村や町などが出てきたりしますが基本的には？の世界。
？の町や国が出て来る事は無い。

・主人公はタダオ。（GS美神・横島忠夫）本名タダリユーオム・
エル・ケル・グランバニア

ピアノカ役はレイコ（GS美神・美神令子）

フローラ役はネリネ（SHUFFLE！・ネリネ）

デボラ役はエミ（GS美神・小笠原エミ）

アンディ役はピート（GS美神・ピート）（オチは分かりますね）

サンチョ役はバーク（Tick!Tack!・バーク）

その他、色んな作品からもキャラクターが出て来ますがそれが誰かは物語が進んだ先で。

・基本、話は元ゲーのドラクエ？に沿って進みますが当然原作に無い展開もあります。

（タダオが無自覚の内にあちらこちらで旗を立てまくっているなど）

・パパス、マーサ、ダンカンなど、キャラクターを入れ替えていないキャラなども多数出て来ます。

パパス役を大樹にしようかとも思いましたが、ストーリー上どうしても死亡フラグは消せないのであえてパパスのままで。

モンスターを倒した時に得られるGゴールドについて。

・最初は倒したモンスターを素材として売り払いGを得るという事

にしようかと思いましたがそれは既にやってる方が居るのでボツ。

・モンスターが冒険者や旅人を襲った際に習性で光り物（G）を盗っていき、それを倒した際に再度手に入れるという方法もあります
が、これも既にやってる方が居ると言う事でこれもボツ。

・そこで思い出したのがアニメ版ドラクエ「アベル伝説」の宝石モンスター。

・魔王の魔力によって凶暴化したモンスターの内部で魔力が結晶化、
宝石になる。

その宝石がモンスターを倒した際にGの代わりの報酬になる。^{ゴールド}

・つまり、タダオが仲間に来るのは体内で魔王の魔力が結晶化して
いないモンスターと言う事。

・タダオが倒す事によってモンスターの体内の魔力は浄化されて結
晶化、それが仲間になるモンスター。

・モンスターはドラクエ？には出て来ないモンスターや原作では仲
間に出来ないけどこの話では仲間に来るモンスターなどが出てき
たりします。

その他の設定はまた後ほど。

Level 2「洞窟の中には」その1

「サンタローズ」

船旅を終え、街道を歩くパパスとタダオ、そしてタダオの肩に乗っているピエール。

そんな二人と一匹の前に目的地であるサンタローズの村が見えて来た。

「やっと帰って来たんやな父ちゃん！」

「そうだな、タダオ」

村の入り口には見張りの村人が立っていて、二人を見つけると警戒するがそれがパパスだと気付くと満面の笑みで二人を迎える。

「パパスさん、パパスさんじゃないですか！帰って来たんですね！」

「おお、エーじゃないか、長い間留守にしたな。これから暫くはこの村に腰を落着けるつもりだ」

「それは皆が喜びますよ。……それはそうと、その子の肩に乗っているのは…スライム!？」

門番のエーはタダオの肩の上のピエールを見るや否や、槍を向けようとしますがパパスは笑みを浮かべながらそれを手で制す。

「心配は要らぬぞ。このスライムは邪気を祓われている、もはや悪さはしない」

「そうやで、ピエールはワイのともだちや！！」

「ピッピイー」

「君は…タダオくんか。大きくなったな、パパスさんやタダオくんが大丈夫と言うのなら心配はいらないな。じゃあパパスさんが帰って来た事を皆に報告しなきゃ」

そう言うところでは村へと駆け出し、喜び勇んで村中にパパスが帰って来た事を叫んで回った。

「おおーっ！っ！っ！ パパスさんが帰って来たぞおおーっ！っ！っ！」

「お帰り、パパスさん」

「やあ、良く帰って来たな！今夜は一杯飲みながら旅の話聞かせてくれ」

「わあーっ！っ！ パパスさんが帰って来たあーっ！っ」

村人達は皆笑顔で二人を迎え、家が見えて来ると玄関の前に召使いのバークが待っていた。

彼の服装は他の村人達とは違い黒を基調とした、いわゆる執事服である。

バークはタダオ達を見つけると勢いよく走りだした。

「坊っちゃんーっ！っ！ 坊っちゃん、坊っちゃんではないですか！！」

「た、ただいまや、バーク」

バークはタダオに駆け寄ると抱き抱え頬擦りをする。

一見するとかかなり危ない光景ではあるが彼のパパスへの忠誠心は偽りなく、彼から寄せられる信頼度も高い為パパスもそれを笑いながら眺めている。

もしこれが、他の男であつたならすぐさま切り捨てられていただろう。

「はははは、大きくなりましたな」

「うん。ワイ、大きくなったやろ」

「留守の間ご苦労だったな、バーク」

「パパス様、このバーク、タダオ様とパパス様のお帰りを一日千秋の想いでお待ちしていました」

「うむ、心配をかけて悪かったな」

「さあ、家の中へ」

そしてパパスとタダオは懐かしの我が家へと入って行った。

「お久しぶりです、パパスおじ様」

そう言いながら二階から降りて来たのは栗色の髪を両側で結んだタダオよりも少し年上の女の子だった。

「おや、君は？」

「私の娘だよ」

「マミア、久しぶりだな。するとこの子はダンカンの娘のレイコか」
「ああ、タダオも大きくなったね。二年ぶりだから当たり前といえは当たり前だけどね」

「タダオ、私の事覚えてる？」

「え〜と。……あつ、レイコや!」

「2才年上のお姉さん呼び捨てにするのはこの口かしら？」

そう言いながらレイコはタダオの口を掴み、思いっきり両側に引っ張る。

「いひゃい、いひゃい、ほめんなはい、れひほおねへひゃん!」

「解ればいいのよ」

「ははははは」

大人達はそんな子供達を微笑ましそうに笑っていた。

「ねえ、タダオ。おじ様達は大人の話があるだろうから私達は二人で遊ばない？」

「うん、遊ぼ」

レイコとタダオはそう言いながら二階へと上がって行った。

「それでマミアよ、何の用事なのだ？私達が帰って来る事を知って

いた訳ではあるまいに」

「ああ、ウチのダンナが病気になってね、薬を調合してもらいに来たんだけど肝心の薬師のビーが洞窟に材料の薬草を取りに行ったまま戻って来ないんだよ」

「うゝゝむ、そうか。私もあの洞窟には用事がある。ついでと言つては不謹慎かもしれないが探してみよう」

「頼んだよパパスさん」

Level 2「洞窟の中には」その1（後書き）

（、・ω・）ルドマン役がフォーベシイなのにサンチヨ役がバークなのは、ちょっと違和感。しかし、闘う召使い（執事）を誰にするかと悩んでいるとあの雄叫びが脳の中を駆け巡ったのです。『坊っちゃんまーまーっ！』と。

Level 2「洞窟の中には」その2

「ところでタダオ、そのスライムはどうしたの？」

「帰ってくる途中で友だちになったんや、名前はピエール。ピエール、この女の子はレイコ、ワイの姉ちゃんみたいなひとや」

「ピイ、ピッピイ」

「魔物と友だちになるなんて、アンタはホントふしぎな子ね。まあいいわ、私はレイコ、よろしくねピエール」

「ピイー」

笑いながらピエールの頭を撫でてやるとピエールは嬉しそうに鳴きながらレイコの手で頭を擦りつける。

「あいさつは終りやな。じゃあ、何して遊ぶ？レイコお姉ちゃん」

「そうね、なら本を読んであげるわ。この本なんか良さそうね」

レイコは本棚から一冊取り出してペラペラとめくるとそのまま本棚に戻し絵本を取り出す。

「やっぱりタダオには絵本の方がいいわよね」

「読めへんのなら素直にそう言えば……」パコーンッ！

「良く聞こえなかったけど何か言ったかしら？」

「……何も言ってますん……」

「ピイ……」

タダオは涙を滲ませ、叩かれた頭を擦りながらレイコと絵本を読んでいく。

ピエールは何やら怯えてる様だ。

《ヤマグチⅡセマシ冒険隊》

冒険家、ヤマグチⅡセマシが世界中の洞窟や未開の地を冒険して回るといふ話の絵本である。

レイコが机の上に絵本を広げて読み、タダオとピエールはその横から覗き込んでいた。

「『まっくらやみだ、これはなにがおこるかわからないぞ』ヤマグチⅡセマシはいま、だれもはいつたことのないどうくつにはいるうとしている」

「なあ、レイコお姉ちゃん」

「どうしたのよタダオ？」

「この絵なんやけど、誰も入った事の無い洞窟やのに何で入って来るカワグチを洞窟の“内側”から描いとるんやろ？」

「……さあ？…、続きを読むわよ。どうくつにはいつたカワグチのあしもとにはひとのあたまのほねが……」

「えらいピカピカできれいな骨や…」スコーーッ！

レイコのこうげき。

タダオに25のダメージ。

ピエールは逃げ出した。

「……黙って聞いてるって事が出来ないの？」

「……カドは反則や……」

「ピキィ〜〜〜〜」

「レイコー、そろそろ宿に帰りますよ」

「はい、ママ。じゃあタダオ、またね」

「うん、レイコお姉ちゃん」

レイコ達は宿へと戻り、タダオは一階へと下りて行く。

「さあ、坊っちゃん。今日はこのバークが腕によりをかけて御馳走を作りますからね」

「わーい、楽しみやー！！」

その日の夕食は思った以上に豪勢で、タダオは久しぶりに腹一杯の食事に満足したようですぐに眠りこんでしまった。

翌日

「ふああ〜〜〜、おはようや」

「お早うございます、坊っちゃん。朝食の用意は出来てますよ」

「さあ、早く顔と手を洗って来なさい」

「は〜い」

タダオがまだ食べている時、いち早く食事を済ませたパパスは立ち上がるとタダオに話しかける。

「タダオよ、私はこれから用事があるので出かけるが決して一人で村の外へは出てはいかんぞ」

「わかったで、いつてらっしゃいや父ちゃん」

食事を続けるタダオをバークは懐かしそうに見ながら呟く。

「本当に坊っちゃんはだんだんとお母上に似て来ましたなあ。お母上のマーサ様もお優しい方でモンスターさえもマーサ様の前では子猫の様に大人しくなったものです。ちょうどこのピエールの様に」

「ピイ？」

「そうなんか？」

「ええ、本当ですとも。（あんな事さえなければ今頃タダオ様もお城で何不自由無く、幸せに暮らしていたものを……）」

「ごちそうさまや！遊びに行ってくるな。ピエール、行くで」

「ピッ、ピューー」

昔の事を思い出し、暗い表情になっていたバークだが元気に駆け出すタダオを穏やかな顔で見送る。

「気を付けて下さいね、危ない事はなさらない様に」
「わかつとるって！」

Level 2「洞窟の中には」その2（後書き）

（、・ω・）川口浩探検隊。幼い頃彼等は私のヒーローでした。本気で信じていた純粋なあの頃にはもう戻れない。

L e c c e 1 2 「洞窟の中には」その3

村の中を歩くタダオだが、もう春も間近だというのに肌寒さに震えていた。

畑にも作物は実らず、焚き火で暖を取っている村人も居る。

「うう、寒い寒い。どうしたっていうんだろうね今年は？」

「皆も寒そうやな。早う春が来ればええのにな」

「ピー、ピー」

そして、宿屋に着くとタダオは二階に上がりレイコ達が泊っている部屋へと入って行く。

「レイコ姉ちゃん、おはようや」

「おや、坊やはパパスさんのタダオ君だね」

「うん、レイコ姉ちゃんは？」

「折角遊びに来てくれて悪いんだけどね、レイコはまだ寝てるんだよ」

「まだ？ずいぶんとおねぼうさんやな」

そう言いながらベットで寝ているレイコを覗き込むが、マミヤは寝ているレイコの髪を優しく掻き分けながらタダオに言う。

「この子は病気の父親が心配でね、昨夜も中々寝付けなかったみたいなんだよ」

「そっかー。ゴメンな、わるいこと言ってもうたわ」

「ははは、いいんだよ。だからもう少しレイコを寝かしてやってね」
「うん。じゃあ、また後でな」

そう言いながら部屋を出て、扉を閉めようとするとマミヤの呟きがタダオの耳に聞こえて来た。

「はあ、パパスさんも忙しそうだしね。誰か捜しに行ってくれたらねえ」

宿屋を出て、少し歩いた所でタダオは足を止めるとピエールは不思議そうにタダオを見上げる。

「ピイ？」

「よっしゃー！ピエール、ワイらで薬師のおっちゃんをさがしに行くんや。そうすればレイコ姉ちゃんやおばちゃんもよろこぶで」

「ピイ、ピイピイ」

そして、いざ洞窟に乗り込もうとするのだが流石に武器がひのきの棒では心許無い。

そこで武器屋で新しい武器を買おうとしたら店の親父は。

「ほう、ビーの奴を捜しに行くのか。だったら特別サービスだ、今あるGにひのきの棒を買い取った分を足して銅の剣を売ってやろう。それでもGは足りないんだけどな、坊やの勇氣に免じてだからな。他の皆には内緒だぞ」

と、銅の剣を売ってくれた。

「ありがと、おっちゃん。がんばってくるで！」

タダオはそう言うを買ったばかりの銅の剣を腰布に挿し、喜び勇んで駆けて行った。

「ははは、冒険ゴツコか。俺も小さい頃はよくやったものだ」

何と言う事でしょう。この男はタダオが本当に洞窟に入とは思ってなかった様です。

「サンタローズの洞窟」

洞窟に入ると流石に薄暗くなって来て、ピエールと一緒にとは言え不安に駆られて来る様だ。

なのでタダオは歌を歌いながら先に進む事にした。

歌うのはあの絵本が題材になった歌で、あのツツコミ所満載の絵本は小さな子供には結構人気があり、そのツツコミ所をツツコミまわったこの歌は子供達の間で流行っていた。

ガイドラインの問題で掲載できないのが残念だ。

「……さそりばちの次はどくいも……」

歌を歌っているタダオの前の方から何やら物音が聞こえて来た。

そして、暗闇の中から出て来たのはスライムとおおきづちの二匹だった。

「ピエール、あいては同じスライムやけどたたかえるか？」

「ピッツ！ピッツピイー！」

ピエールは任せろと言う様に身構えている。

おおきづちは初めて見るモンスターだが、パパスからその特徴などは聞いているので驚く様な事は無かった。

だが、ピエールとは違うその赤く濁った瞳を見ると何処となく寂し

くなるタダオであつた。

L e c c e 1 2 「洞窟の中には」その3（後書き）

（、・ω・）タダオが歌っているあの歌、小説版から持ってきて来たネ
タでしゅ。

Level 2「洞窟の中には」その4

「本当ならともだちになれるかも知れんのやけど、かかって来るならワイもてかげんでけへんで」

『ピキィ〜、ピキヤー〜ッ!〜!』

「ピイ、ピキーーーイ!〜!」

『ピキッ……ピギヤアッ』

スライムはピエールに襲い掛かるがピエールはその突進を軽くかわし、逆に体当たりをかける。
ピエールの体当たりをまともに受けたスライムはそのまま壁にぶち当たり弾け飛んだ。

『フガーーー!』

「こんのおーーーっ!〜!」

タダオの頭ほどの大きさの木づちを振り上げながら突進してくるおきづちにタダオは慌てる事無く振り下ろして来る木づちをかわし、銅の剣を振り抜いた。

『フギヤーーーー!』

おおきづちは悲鳴を上げながら真つ二つになり、地面に落ちると溶ける様に消えて行き、後に残ったのは宝石だけだった。

その宝石を拾い上げるタダオの所にピエールがスライムの宝石を啜えてやって来た。

「ごくらうさんや、ピエール」
「ピイ、ピイ」

ピエールから宝石を受け取るとタダオはピエールの頭を優しく撫でてやると、それが気持ちいいのか体を揺らしながら喜んでいる。

そしてタダオは手の中にある宝石を見つめると寂しそうに呟いた。

「ワイがうばった命か……」
「ピイ？」
「なんでもないんや」

宝石を袋の中にしまい込むとタダオは再び歩き出した。

そして次々と襲い掛かってくるモンスター達。
蝙蝠の様な姿をした「ドラキー」、丸い体に何本ものとげを生やした「とげぼうず」、大きめの体で頭に鋭い角を生やした「いっかくウサギ」、突然足元の地面から攻撃して来る「せみもぐら」。

此処まで襲って来たモンスターに共通するのはその瞳が赤く濁っている事、思い返せばピエールが襲って来た時は目つきは鋭かったものの、瞳は濁って無かったように思い出すタダオだった。

奥へと進み、地下に続く階段を下りると岩が崩れている所が見えた。近づいてみて見ると更に下の階に岩が落ちている様だ。

「あぶないなー。ワイらも気をつけんといかな、ピエール」
「ピイ、ピイ」

更に奥へと進み、何度目かの戦闘の際にピエールが傷を受けてしまった。

「だ、だいじょうぶか、ピエール？」
「ピ…ピイ〜」

ピエールはタダオに心配をかけまいと平気そうな振りをするが、それがやせ我慢だと言う事は誰が見ても分かる事であった。

「こんな時、父ちゃんやったら“ホイミ”でピエールを治せるのに……、あれ？」

タダオが“ホイミ”と口にした際、手から何か温かな力を感じ、自分の体の傷が癒えている事に気付いた。
それはパパスにホイミをかけてもらった時と同じ暖かさだった。

「…ひよつとして……、 “ホイミ”」
「ピ？…ピイ~~~~」

ピエールに手をかざしてホイミと唱えると、タダオの手から光が零れてその光はピエールの体の傷を癒して行く。

「ホ、ホイミや！ピエール、ワイにもホイミが出来たで！」
「ピイ、ピイ~~~~」

カサリ

そうやって喜んでいると、後ろの方から物音が聞こえて来た。
神経が過敏になっているタダオはすぐに振り返り、銅の剣を構えながら叫んだ。

「モ、モンスターか！？ かって来るならかって来んかいっ
！！」
「ピキーーイッ！！」

振り向いた先には一匹のスライムが居り、怯えながら叫んで来た。

「まつ、待つてよ！虐めないでよ、僕は悪いスライムじゃないよー
ー！！」

「ス、スライムがしゃべった？」
「パイ？」

スライムが喋った事に驚くタダオだが、すぐに構えていた銅の剣を下ろすと鞘の中へと戻した。

スライムはその行動に驚きながらも少しづつタダオへと近づいて行く。

「僕の事、悪いスライムじゃないって信じてくれるの？」
「おう、お前の目はピエールみたいにキレイやからな。悪いモンスターならもつといやな色をしてるで」
「パイ、パイ」

タダオがスライムの問いに答えると、ピエールもまた「その通り」と言わんばかりに頷いている。

「へえ〜、君の名前はピエールって言うのか」

「パイ、パイパイ。パイ……？」

「うん、とてもいい名前だね。僕？僕の名前はね……」

「お前、ピエールと話せるんか？」

「そりゃ、僕もピエールも同じスライムだもん」

「あ、そっぴやそっぴやっぴな。わはははは」

「パイ……」

照れくさそうに頭を掻きながら笑うタダオをピエールは呆れた様に見つめ、スライムはそんな二人を不思議そうに眺めながら語りかける。

「君は人間なのに何でモンスターのピエールと仲良くしてるの？ピエールって名前も君が付けてくれたってピエールが言ってるし」

「何でって、ともだちと仲ようするのは当たり前やろ？」

「友だち……」

自分と同じスライムを当たり前の様に友だちと言うタダオをスライムは少し眩しそうに見つめる。

「パイ、パイパイ」

「そうだね、忘れていた。僕の名前はスラリン、よろしくねピエール。そして……」

スラリンは自己紹介をすると少し不安そうにタダオに目を向ける、すると。

「ワイか？ワイの名前はタダオや。仲よろしうな、スラリン」
「ピイツ、ピィ〜」
「あ……う、うんっ！」

暗い洞窟の中で一人ぼっちだったスラリン、人見知りで寂しがり屋だった彼に初めて友だちと言う光が射した瞬間だった。

くスラリンが仲間になったく

Level 2「洞窟の中には」その4（後書き）

（、・ω・）と、言う訳で洞窟の中に居たあのスライムがスラリンとして仲間になりました。

L e v e l 2 「洞窟の中には」その5（前書き）

二話目は今回で完成です。

Level 2「洞窟の中には」その5

洞窟の中ではスラリンが先頭になって道を案内している。

流石に洞窟の中を住处にしていただけはあつて魔物の少ない所を選んで進んでいる。

「ところでタダオ」

「ん、何やスラリン？」

「タダオはどうやってピエールを仲間にしたか覚えてる？」

「ん、どうやったかな？いつもはたおした後はじけ飛んでたんやけど、ピエールはすぐに起きあがって来たんや。父ちゃんに聞いたらともだちになりたがつて言うからともだちになったんや。な、ピエール」

「ピイ、ピイ」

「そうか、だったらピエールは“染まりきってなかった”んだね」

「…そまりきる？」

「うん。襲つて来る魔物を倒した後、宝石が残るだろ？」

「……ああ……」

タダオはそう答えながら袋の中から宝石を取り出す。

「それは僕達の体の中にある魔力が魔王の悪い波動で魂ごと結晶になったものなんだ。魔王の波動に“染まりきつてしまえば”もう元のふつつの魔物には戻れないんだ。ピエールはまだ“染まりきる”前だったから元の魔物に戻る事が出来たんだよ」

「そうなんや、良かったなピエール」

「ピーーー」

（それでも本当ならこんなに仲良くなれる筈は無いんだけど）

そんな風に話をしながら進んでいると、地下に続く階段がありタダ
才達は地下に降りると何処からかうめき声が聞こえて来たのでタダ
才達はすぐに駆け寄って行く。

其処に居たのは一人の男で上の階から落ちて来たであろう岩に足を
挟まれていた。

「ううう、だ、誰か……。誰か助け……」

「ピーパイ」

「うわぁー！ーっ！！ ま、魔物……もうダメだぁ……っ！！」

「おちつきや、おっちゃん」

「わぁぁ……、へ？」

近づいて来たピエールに慌てふためく薬師だが、続いて聞こえて来
たタダ才の声に幾分落ち着いていた様だ。

「こ、子供？何で子供がこんな所に？」

「おっちゃんは薬師のおっちゃんか？」

「あ、ああ、そうだが」

「よかった、さがしてたんやで。レイコ姉ちゃんの母ちゃんが薬が
来るのをまつとるんや、はやく帰ろうや」

「そ、そうか。ならこの岩をどかしてくれないか、身動きが取れな
いんだ」

「わかったで、ピエールとスラリン手伝^{てつで}うてや」

「ピイツ」

「分かったよ、タダオ」

タダオとピエール達は岩を力一杯に押して行くと、岩はゆっくりと動き出し薬師のビーはようやく解放された。

「そうか、君はパパスさんの息子のタダオくんか。しかしその魔物達は一体……」

「ピエールとスラリンはワイのともだちや。悪い魔物やないで」

「ピイーーーー♪」

「友だち……、嬉しいな」

岩の下から解放された薬師のビーはタダオのホイミで傷を癒してもらい、皆で話をしながら洞窟から出る為に歩いている。

歩いて行く先には光が射して来てようやく洞窟から抜け出した。

「さて、早速ダンカンさんの薬を作らなくてはな。タダオくん、ありがとうな」

「どういたしましてや。はやく作ってやってな」
「ああ、任せておきなさい」

ビーは笑いながら親指を立て、仕事場へと走って行った。

「さて、ワイらも帰ろ。スラリンのこと父ちゃんとバークに紹介しなきゃいかんしな」

「本当にいいのかな？」

「ええにきまつとるやる。ワイらはもう、ともだちなんやで」

「ピーー」

「うん、ありがとうタダオ」

そして、タダオ達も家へと帰って行く。

翌日。

ビーが慌てず急いで正確に頑張った為、薬は明け方には完成し、マミヤとレイコはさっそく薬を持ってアルカパへと帰る事になった。

「女二人だけでは何かと危険だから、私が護衛して行くでしょう。タダオよ、お前も来るか？」

「うん、もちろんワイも行くで」

「ピィッ」

「僕はまだ外の人間が怖いから留守番してるよ」

ピエールはもちろん自分もついて行くと張り切り、スラリンはまだ外が怖いと留守番しようとする。
そんな二人にパパスは。

「ピエールには悪いがお前も留守番だ」

「ピィー？」

「なんでや、父ちゃん？」

「アルカパはこの村より幾分大きな町だからな。そんな所にピエールを連れて行くと騒ぎになりかねん」

「ピエールは悪い魔物やないで！」

「それはよく分かってる。だが、人は魔物というだけで怖がるのだ。それにダンカンの家は宿屋だからな、悪い噂が立つと客が泊らなくなるやもしれん」

「ごめんね、タダオくん」

「ううん、いいんや。というわけでピエールもるすばんや」

「ピィ〜」

「坊っちゃん、パパス様、お気をつけて行って来て下さい」

「ピィ〜」

「気をつけてね、タダオ」

バークにピエール、スラリンの見送りを受けてパパスとタダオ、そしてマミヤにレイコはアルカパへと歩いて行く。

「ところでタダオ？」

「なんや、レイコ姉ちゃん」

「その頭のタンコブどうしたの？」

「……お尻ペンペンとゲンコツ、どっちがいいかって父ちゃんに言われたからな。……、さすがにもうこの年でお尻ペンペンはかんべんや」

「冒険の書に記録します」

《次回予告》

何とか薬師のおっちゃんを見つけて薬が出来上がったで。

父ちゃんにゲンコツもろたけどな……。

アルカパに帰るレイコ姉ちゃん達にワイもお伴でついて行ったんや。でも、そこで……アイツら何ちゅーことをするんや！

オバケ退治？やったるーやないかい！！

次回Level3「オバケ退治にレヌール城へ」

ワイの苦手は…父ちゃんのゲンコツや…

Level 2「洞窟の中には」その5（後書き）

（、・ω・）タダオのセリフでひらがな表記が多いのはまだ6才だからそれっぽさを出そうとしてるからです。

（　^ω^　）さて、次回はいよいよアルカパへと舞台を移します。そして当然、あのイベントには彼女が登場します！！お楽しみに。

Level 3「オバケ退治にレヌール城へ」その1（前書き）

少し思う所があつて、タイトル変更。

……やっぱり、「オバケクエスト」は無いだろう。

注・レイコがレヌール城のオバケの事を説明してる所に修正を加えました。

Level 3「オバケ退治にレヌール城へ」その1

「アルカパ」

サンタローズから半日ほど歩いた所にアルカパの町はあった。

元々、アルカパとサンタローズは「レヌール」という小国に属していたがレヌール王家は後継者を得る事が出来ずに断絶、王家は滅びレヌール城も今は廃城となり訪れる者は無いと言う。

それにより、現在アルカパとサンタローズは大国「ラインハット」に併合されている。

Level 3「オバケ退治にレヌール城へ」

「ただいまー、やっと帰って来たわ」

レイコは元気に叫びながらアルカパの町の門を駆け抜け、門番をしている男はそんなレイコに笑顔で話しかける。

「お帰り、レイコちゃん。薬は手に入ったかい？」

「ええ、これでパパもすぐに元気になるわ」

「それは良かった。さあ、早く薬を持って行っておあげ」

「うん、じゃーねー」

レイコは家でもあるこの町一番の宿屋へと駆けて行き、マミヤとパスにタダオも漸くアルカパに辿り着いた。

「全く、レイコったら。少し急ぎ過ぎよ」

「はははは、いいじゃないか。それだけダンカンの事が心配だったんだろう」

「お帰り、マミヤさん。それにアンタは… パパスさんじゃないか。久しぶりだな」

「ああ、久しぶりだな。シーよ」

「父ちゃーん、早^{はよ}うしてや」

何時の間にか先に進んでいたタダオが飛び跳ねながらパスを急かしている。

そんなタダオにパスは微笑ましそうに笑いながら答えてやる。

「分かった分かった、そう急かすな。ではな、シー」

門番をしているシーに挨拶を済ませるとパスとタダオはマミヤに連れられて宿屋へと入って行き、ダンカンが寝ている寝室に案内される。

「ダンカン、久しいな。具合はどうだ？」

「おお、パパスじゃないか。何時帰って来たんだ？ゴホゴホッ」

「起きずともよい。マミヤ、早くダンカンに薬を」

「ありがとうパパスさん。さあアンタ、薬だよ」

ダンカンは薬を飲ませてもらうと楽になったのか、顔色も若干良くなってきた。

「もう大丈夫だろう。タダオ、私達は少し話があるからお前は町でも歩いて来なさい。レイコちゃん、タダオの案内をたのめるかい？」

「ええ、任せておじ様。行こう、タダオ」

「うん。たのむでレイコ姉ちゃん」

そうして二人は町へと出かけて行く。

パパスと一緒にいろんな所を渡り歩いて来たタダオだが、立ち寄るのは小さな村や町ばかりであった為、アルカパはタダオには初めての大きな町であった。

レイコと一緒に色々な店などを覗いたりしていると何処からか小さな悲鳴みたいな声が聞こえて来たので、その声の方に向かってみると、池の中にある小島で、二人の子供が小さな動物を苛めていた。

「ほらほら、もっとちゃんと鳴いてみるよ」

『キュ〜ン……、コ〜ン』

「違っだろ、猫ならニャーンで鳴かなきゃダメだろ」

『ギャンツ！コン、コ〜ン……』

小さな動物は怪我をしているのか抵抗も出来ずに蹲り、力無く呻き声を上げているが、それでも子供達は構わずに面白がって苛め続けている。

「アイツら……、なんちゅー事をしとるんや!!」

「あいつ達は近所でも有名な悪ガキよ」

「こらーっ！弱いものいじめはやめんかいつ!!」

「な、何だよお前は。コイツは俺達が見つけたんだ、どうしよう俺達の勝手だろ」

「そうだそうだが、邪魔するなよ。それに面白いだろ、コイツ鳴き声がへん……」

タダオはすぐさま駆け出して苛めを止めさせようとするが子供達は耳を貸さずに苛めを続けようとしていた。

だが、タダオの後ろから近づいて来るレイコの姿を見つけると、勝手にオロオロとした。

「鳴き声が……何だって？」

「げえーっ!! レ、レイコー!!」

「乙女に向かって「げえーっ!!」とは何よ!!」

「ばびろにあっ!!」

レイコの拳から繰り出される“星屑で革命”な拳を受け、いじめっ

子兄は吹き飛んだ後、頭から地面に叩き付けられた。

それはそれとして
閑話休題

「さあ、その猫さん放してやるんや」

「嫌だね」

「どうしても嫌なの？」

「ぐっ……、い……嫌だ……」

いじめっ子兄弟は猫？を放せというタダオとレイコにあくまでも嫌だと言つて譲らない。

正直、レイコが怖い事は怖いのだが男としての最後の意地が勝っている様だ。

彼等の足元には木に紐で繋がれた猫？が辛そうに蹲っている。

猫？と表記してるのはその動物の尻尾が九本に分かれているからだ。この動物…否、この魔物の名は「キラーフォックス」それも、最も獰猛で知られる「キラーフォックス・ナイン」である。

本来なら大人達がそんな恐ろしい魔物を町に入れる事を許す筈もなかったのだが本来「キラーフォックス」はこの地方と言うよりこの大陸には住んでいない魔物なので大人達もそれと気づかずいたら

しい。

「じゃあ、どうやったら放してくれるんや」

「そうだな……、じゃあ噂のレヌール城のオバケを倒したらこの猫はお前達にやるよ」

「レヌール城のオバケ？それって何や、レイコ姉ちゃん」

「此処から少し離れた所にある古いお城で、もうずっと昔から誰も居ない筈なのに夜になるとお城から灯りが漏れ出して気味の悪い笑い声なんかが聞こえて来るのよ」

「そ、そっか……。とにかく、そのオバケを倒して来たら猫さんはワイらがもらうで」

「よし、約束だ。オバケ退治が出来たらこの猫はお前達の物だ」

「決まりね！タダオ、さっそく今夜出かけるわよ」

「おう！と、その前に……“ホイミ”」

タダオは辛そうにしているキラーフォックスに近づくと回復呪文ホイミを唱えてその体に付けられた傷を癒して行く。

「キユウ？……コン」

「もうちよつとのしんぼうやで。すぐに助けに来てやるからな」

「コン…コン、コン」

キラーフォックスはタダオの言う事が分かったのか、しきりに頷きながらその尻尾をパタパタと振っていた。

「タダオ、あんた魔法が使えたのね」

「まだホイミだけやけどな」

「とにかく、オバケ退治がすんだらその猫は私達の物になるんだからね。もし、また苛めて傷が増えてたらタダじゃ済まさないわよ」

「わ、分ったよ」

「じゃあタダオ行くわよ。ちゃんと準備しておかなきゃ」

「了解や」

Level 3「オバケ退治にレヌール城へ」その1（後書き）

（、・ω・）と、言う訳でタマモ登場、それによりキラーパンサーからキラーフォックスへと変えさせて頂きました。

Level 3「オバケ退治にレヌール城へ」その2

それからタダオとレイコは武器屋へと行き、戦力の強化を計った。タダオは新たにブーメランを、レイコには茨の鞭を買い、防具も革の鎧に革のドレスを購入。

それらはばれない様に宿屋の裏に置いてある樽の中に隠しておいた。準備は万端、後は夜になるのを待つだけなので体力を温存する為にゆっくり休んでおこうと宿屋の中に入るとパパスは帰る準備をしていた。

「戻ったか、タダオ。ダンカンの見舞いも済んだ事だしサンタローズに帰るぞ」

「え…ちょ、ちょっと待ってや父ちゃん」

「ん？どうしたタダオ」

「今から帰るんか？」

「ああ、今からなら夜になる前に帰り着けるだろうからな」

「そ、そんな…猫さんが…」

「タダオ……」

今帰ったらレヌール城のオバケ退治は出来ず、猫を助けるという約束が果たせない。二人共、どうしようかと悩んでいるとそこに助けの声が聞こえて来た。

「ちょっとパパスさん。そんなに急いで帰る事もないだろう、一日位泊って行きなよ」

「そ、そうよおじ様！私ももう少しタダオと遊びたいわ」

「ワイもレイコ姉ちゃんともう少し一緒にいたいで！」

「そ、そうか。ならば少し甘えさせてもらうとするか」

「わーい。（何とかたすかったな、レイコねえちゃん）」

「今日は一緒に寝ましようね、タダオ。（危ない所だったわ。ママには感謝ね）」

両手を繋ぎ、飛び跳ねながら喜ぶ二人をパパスとマミヤは微笑ましそうに見つめている。

まあ、傍から見ると仲の良い二人が一緒に居られる事を喜び合っている様にしか見えないのだから。

だからこそ………

「これで家の宿屋も将来は安泰だね。タダオ君なら良い婿になれるよ、ねえパパスさん」

「マミヤはそんな風にタダオの事を狙っていたのか……」

「あら、当たり前じゃないか。ほほほほほほ」

幸か不幸か、そんな大人達の会話は子供達の耳には届かなかった。

そして、大人達も眠りについた深夜、レイコは隣に寝ているタダオを起こし家から抜け出して行く。

念の為、パパスが寝ている所も覗いて見たがぐっすりとよく寝ていた。

それでも「マーサよ、私達のタダオは真直ぐに成長しているぞ」と、寝言を言った時には黙って行く事に罪悪感もあったが猫を助ける為だと自分達に言い聞かし、隠してあった武器と防具を身に付けてレヌール城へと歩き出した。

「見えて来たわ、あれがレヌール城よ」
「うっわ」。うすき悪い城やなあ」

タダオとレイコの視線の先に佇むのは、嘗ては壮観な白亜の宮殿で在ったであろうレヌール城。

しかし現在はその外見に当時の面影を残すのみで、暗雲に包まれ時折雷鳴が轟く怪しげな城と化していた。

「さあ、今更逃げるだなんて言う選択肢は無いからね。覚悟を決めなさい」

「に、逃げるつもりなんてないけど、きみ悪い事には変わりあらへんで」

「グダグダ言わない。ちゃっちゃっと進みなさい」

「へっい」

そして二人は城の正門から入ろうとするが、巨大な上要素要所が錆びついているらしくその扉は開かない。

何処か他に入る場所が無いかと探し回る内に、城の裏側に上へと登れる鉄梯子を見つけた。

「とりあえず、入れそうな場所は此処しか無い様ね」

「やな。じゃあ、レディーファーストでレイ…バゴムッ!!…ワイが先に登らせていただきます。いてて…」

レイコに拳骨を受けた頭を擦りながらタダオは梯子を登って行き、レイコもその後続く。

登り終えた先にはアーチ状の門らしき場所、その先には城の中へと招き入れる様に扉が開いていた。

「あそこから入れるわね、行くわよタダオ」

「なぐんか、嫌なよかんがするんやけどな」

周りを警戒しながら進み、扉から城の中に入ろうとした瞬間、突如門らしき場所のアーチ状の部分から鉄格子が降りて来て二人は閉じ込められてしまった。

「…嫌なよかんはしとったんや」

「い、今更言っても仕方ないでしょ。こうなったら先に進むしかないわ」

「せやな。城の中ならならほかに出口があるかもしれん。オバケを倒してからさがそうな」

「その意気よ」

半開きの扉を開いて中に入ると其処には幾つかの棺桶が並び、おどろおどろしい雰囲気の中、二人は身を寄せ合いながら進んで行く。

そして目の前に下の階に降りる階段が見えて来た時、タダオはすぐ隣に居た筈のレイコの気配が消えている事に気が付いた。

「あ、あれ？レ、レイコ姉ちゃん？どこや？い、いたずらは無しやで……。ひょっとしてオバケにさらわれたんかっ！？」

レイコが傍に居ない。オバケに攫われた。

この図式が頭を過ぎった時、タダオはさっきまでの怯えは消え去り、レイコを探し出す為に全力で駆け出し、階段を駆け下りて行く。

下の階に降りると石像が並ぶ先に明かりが漏れて来る扉を見つけ、再び駆け出す。

すると石像の中の一体が突如動き出し、タダオの行く手を遮る様に通路を塞いだ。

「じゃまや——っ！！ どかんか——いつ——！！」

タダオの攻撃

会心の一撃

動く石像をやつつけた。

レイコを心配するが故での火事場の馬鹿力か、強敵である筈の動く石像を一撃で倒した上、それに気付かずにいるタダオだった。

扉を開くと、其処は城の屋上の一角で庭園みたいな場所に墓が二つあった。

タダオはその墓に近づいてみると墓石には「タダオのはか」と書かれており、もう一つの墓石を見ると「レイコのはか」と書かれていた。

「「レイコのはか」って……、たいへんや——っ！！ レ、レイコ姉ちゃ——ん！！」

タダオは大慌てで墓石を力一杯に押すと墓石はゆっくりとずれて行き、中からレイコが出て来た。

「レイコ姉ちゃん、ぶじやったんやな。良かったー!!」

安心したタダオは泣きながらレイコに抱き付いたが、レイコは何も言わずにその手をそつと離させるとゆっくりと立ち上がる。

「レ、レイコ姉ちゃん？」

その体から湧きあがる怪しげな雰囲氣に少し怯えながらもタダオはレイコの名を呼んでみた。

[illegible]

「ど、どうしたんやレイコ姉ちゃん。ちよつと怖いで…」

「あはははははは、あーっはっはっはっはっはっはっ！！」

レイコの笑い声はその黒いオーラと共に激しさを増し、そして……

「私を墓の中に押し込むなんていい度胸してるじゃない、あんの腐れ悪霊共！！……………、この美神令子が極楽に逝かしてやるわっ！！」

遂にレイコの怒りは限界を超えた。

「美神って誰やーーーーっ！？」

ついでにタダオの恐怖も頂点に達した。

「冒険の書に記録します」

《次回予告》

猫さんを助ける為にオバケ退治にやって来たレヌール城。でも此処には猫さんよりもっと困ってる人達が居たんや。待っててな王様たち、ワイらが絶対に助けたるからな。

そうや、猫さんも王様たちも、ワイとレイコ姉ちゃんが助けるんや。

……でもな、もう一度聞くでレイコ姉ちゃん。

次回Level4「グレートシスターGSレイコ極楽大作戦!!」

美神って誰やーっ!?

Level 13「オバケ退治にレヌール城へ」その2（後書き）

（、・ω・）ありのまま、全てを告白します。美神をピアノ力役にしたのはこのネタをやりたいかつたからです。でもまあ、それ程ハズレ役って訳でも無いと思うんですよ、美神もあれで結構面倒見はいい方ですし。とにかく此処の美神は素直レイコになった美神って事で。

……次回のタイトルもあくまでもネタで主役はタダオです……の筈。

Level 4「GSレイコ極楽大作戦!!」その1

レイコを助け出した後、タダオ達は再び城の中へと進んで行く。
下の階に降りると其処は嘗ては図書室だったのか、本棚が乱立し、
その内幾つかの本棚は倒れ伏している部屋だった。

「……もうみんなボロボロで読めないわね」
「そうやな、もったいないわ……。あれ？」
「どうしたの、タダオ？」
「いや、だれかそこにおったような気が」
「もしかして、噂のオバケ？」

そう言い、少し怯えながら辺りを窺っていると淡い光に包まれた一人の女性の姿を見つけた。

「うわっ！」
「きゃっ！」

突然の事に驚いた二人だが、その女性の悲しそうな顔を見ると不思議と恐ろしさは感じなかった。
女性は二人の顔を見つめた後、ゆっくりと歩き出し倒れていた本棚の中へと消えて行った。

「レイコ姉ちゃん」

「ええ、あの本棚の下に何かありそうね」

Level 4「GSグレートシスターレイコ極楽大作戦！！」

「「よいしょ、よいしょ」」

二人は力を合わせて倒れていた本棚を押すとその下から隠れていた階段を見つけ、下の階へと降りて行く。

少し進んだ場所に立派な扉があるので中へと入ってみると其処には天蓋付きのベットがあり、此処が嘗ては王と王妃の寝室であった事が分かる。

「ここは王様達の寝室だったのね」

「もうボロボロやけどふかふかで気持ちいいベットやったんやろな」

『そうです。王族としての激務が終わった後、此処で王である夫と過ごす時間は私達にとって掛け替えのない穏やかな時でした』

二人が部屋の中を見回していると、何処からともなく女性の声が聞こえて来て、その方向に目を向けるとソファーにさっきの女性が座っていた。

「あ、貴女はひょっとして……お、王妃様ですか？」

『はい、私がレヌール王妃、アリナです』

「ちゅーことは、王妃さまがうわさのオバケなんか？」

「そんな訳ないでしょー!!」

「ふぎゃんっ!!」

レイコに拳骨を受けたタダオが頭を擦っているとアリナはゆっくりと語り出す。

『私とあの人との間には何時まで経っても子供が出来ませんでした。そして、何時しか私は何処からか流れて来た謎の病に倒れ、そのまま命付けました。それから後、あの人もまた同じ病にかかり死んでしまわれました。この城に尽くしてくれた家臣たちも同様に。その為、レヌール王家は途絶えこの地は隣国ラインハットに併合される事となりました』

「そうだったんですか…」

「王妃さまたち、かわいそうやな。ぐすん」

レイコとタダオはそんなアリナの話を聞きながらもその悲劇に涙を零していた。

『あなた達は優しい子供ですね、その綺麗な涙で私の悲しみも少しは癒されます。私達にもあなた達のような子供がいれば…』

「でも、王妃様達は何故幽霊のままさまよってるの？」

レイコは疑問を聞いてみた。

アリナは目を瞑りながら顔を伏せ、少し考えてみたのか徐に顔を上げながらレイコ達に答える。

『私達の体はこの城に葬られ、安らかな眠りの中に居ました。しかし、ある日突然その眠りは遮られました。何者かがこの城を牛耳り、私達の魂を呼び起こしたのです。その日から私の魂はこの城を彷徨い続け、同じ様に彷徨っているであろう王の魂とはその何者かの邪魔によってすれ違い続けているのです』

「酷い……」

「安心してや、ワイらはそのオバケを退治しに来たんや。王妃さま達も助けてやるからな!!」

「そうね、タダオと私でそんな奴コテンパンにしてやるわ」

「「えいえいおー!!」」

アリナのそんな二人を見つめる瞳には涙が浮かんでいた。

『ありがとう二人共、あなた達は本当に勇気がある子供ですね。あなた達に神の御加護がありますように』

そう言つて送り出してくれたアリナを残して二人は再び城の中を捜し始めたが、その間も廃墟になった城に住み着いた魔物達が襲つて来る。

大蛇の骨が邪悪な波動を受け、仮初の命で動き続ける「スカルサーペント」

まるで蛇の様に怪しげな炎の様な幽体の「ナイトウィプス」

長い舌を持つ見た目その物の「ゴースト」

捨て置かれた蠟燭に邪霊が取り憑いた「おばけキャンドル」

次々と襲い掛かってくる魔物達だが、幼いながらも幾度もの実戦でレベルアップを重ねているタダオ、そんな彼に負けじと闘うレイコの前に魔物達も倒されて行った。

歩き続ける二人の前にアリナの時の様な淡い光の中に一人の男性の姿が浮かび上がって来た。

立派な服装に頭に乗っている王冠から、彼が王妃のアリナが言っていた王様だと言う事が見てとれる。

「すみません、あなたが王様ですか？」

『ん？おお、これは可愛らしいお客様達だ。……それにしても私の様な幽霊を目の前にして怖くないのかい？』

「全然、ねえタダオ」

「うん、王妃さまと同じや。ぜんぜん怖くないで」

『な、なんと、お前達は王妃に……アリナに会ったのかい？』

「ええ、王様の事も心配してたわ」

王妃の霊とも出会い、同じ様に彷徨っている事を伝えるとレヌール王は悲しい顔をして涙ぐんでいた。

「安心してや王さま、ワイとレイコ姉ちゃんが悪いオバケをたおして王さまたちを助けたるから。王妃さまともそう約束したんや」

「そうよ、大船に乗った気持ちで任せておいて!!」

『あ、ありがとう、勇気ある子供達よ。お礼と言っては何だが君達の現在のレベルを調べてあげよう』

レヌール王はそう言うのとタダオとレイコの頭の上に手をやり、何か呪文の様な言葉を呟くとその手に灯った光が二人の体を包んだ。

『ふむ、坊やのレベルは年齢からみても結構高いな』

「王さまは神父さまやないのにそんな事がわかるんか？」

「こら！分かるんですかでしょう」

『はっはっはっ、構わぬよ。僕も神父達と同様に精霊の声を聞く修行はしておるからの、王座に着く者の嗜みと言う物じゃよ。坊やのレベルなら“バギ”が使えるだろう』

「バギ？バギってあの手から風がビューンって飛んでいくヤツか？
やったー」

レヌール王に調べてもらい、“バギ”が使えると知ったタダオは喜んで走り回るが、そんなタダオを見て面白くないのがレイコである。

「王様、私は？私は何も呪文は使えないんですか？」

『落ち付きなさい、君もレベルアップしているからね。君は“メラ”と“マヌーサ”が使える様だ』

「メラとマヌーサ？」

『メラは炎を飛ばす呪文、マヌーサは霧の中に幻覚を見せる呪文だ』
「炎を飛ばす？……いいわね、ソレ。今の私に丁度いい呪文だわ」

レイコはちよつと危ない眼をして「くつくくつ」と嗤う。

そんなレイコを見てレヌール王は後頭部に大きめの汗を流し、タダオは涙目で怯え、王の体にしがみ付いていた。

『あ、あの娘は何かあつたのかね？』

「オバケにさらわれて、お墓の中にとじこめられたんや」

『な、なるほどな……』

「さあ、タダオ。先を急ぐわよ」

「ラジャりました！！」

先を急ぐと言うレイコの言葉にタダオはテンパっていたのか、良く分からない返事を返す。

振り返ったレイコの目が一瞬赤く光ってた様に見えたのだから仕方ないであろう。

Level 4「GSレイコ極楽大作戦!!」その1（後書き）

（ゝ・ω・）ここでまた設定変更、レヌール王が魔物退治を依頼するのではなくタダオ達自分達から率先して退治に行きます。呪文習得も王の助言で使えるようになりました。

Level 4「GSレイコ極楽大作戦!!」その2

「じゃあ王様、少し待っていてね。すぐにオバケ達を倒して王様も王妃様も助けてあげるから」

「ワイもがんばるで!!」

『すまないな子供達よ、私も力になりたいのだが命無きこの体では何も出来ぬ』

すまなそうに首を垂れるレヌール王に「気にしないで」と笑いながら答え、レイコとタダオは城の中を進んで行く。

その間も襲い掛かってくる魔物達を撃退しながら先を進むと今迄で一番立派な扉を見つけた。

扉を開き、中に入ると玉座に緑色にくすんだフードを被った何者かが座っていた。

その者から感じる気配は今までの魔物とは明らかに違い、レイコとタダオはこいつが王と王妃を苦しめている元凶だと直ぐに察した。

《親分ゴースト》

ゴーストとはいってもこの男は魔物では無く、れっきとした魔族である。

魔族、それはこの人間界とは別の次元にある魔界の住人でその保有する“暗黒魔力”を用いて魔物達を操る事が出来る。

この城に住み着いている魔物達も親分ゴーストに操られているのであろう。

「アンタが王様達を苦しめている一番悪い奴ね！」

『ひひひひひひ、だとしたらどうするね？』

「ワイらがやつつけてやる！！」

『おお、勇ましい勇者様だ。ところでお腹は空いてないかい？』

「お腹？」

言われてみれば二人は武器や防具は用意していたが、夜食になる食べ物を用意しておく事にまでは頭が回らなかった。

そして、その事に気付いた途端二人のお腹は「ぐぐぐ」と鳴った。

『ひひひひひひ、どうやら腹ペコの様だな。ならば食事に御招待するでしょう』

「う…、い、いらんわい！！」

「そうよ、誰がアンタ達になんか御馳走になるもんですか！！」

『何か勘違いしてる様だな。…食事になるのは、お前達だよ』

親分ゴーストはそう言い放つと、コンコンと足で床を鳴らすと二人の足元の床が抜け、そのまま下へと落ちて行った。

「どわーーーーっ！！」

「きゃああーーーーっ！！」

ベチャッ！！

「な、何や？変にベチャベチャする所に落ちた……くっせー！！」
「何よこれ！？ お肉に魚に野菜、みんな腐ってるじゃない！！」

魔物は大抵が雑食であり、何でも食べる。

だが邪悪な意思に目覚め、知恵を付けた魔物は何故か腐った物を好んで食べる傾向がある。

『何だ？何か落ちて来たぞ』

『こりゃあ、何とも旨そうながキ共じゃないか』

『へへへへ、丁度腐肉の汁がミックスされて味付けも完璧だな』

『さあ、お前達は踊れ踊れ！もつと俺様達を楽しませるんだ！』

『そんな、あんなに小さな子供達を食べるなんて……』

『嫌だ！これ以上お前達の為になんて踊りたくない！』

『もういい加減、儂らを安らかな眠りに戻してくれえ』

食卓を囲む魔物の周りにはおそらくはこの城に仕えていたであろう者達の幽霊が強引に踊らされていた。

その皆が悲壮な表情をしており、若い女性や男性だけでは無く年老いた老人の幽霊もいて、涙を流しながらもその踊りは止まる事は無かった。

『ひやはははっ！さて、お前達も美味しく頂いた後はこいつ等と一緒に踊りに加わってもらおうぞ』

魔物達は舌舐めずりをしながら二人にそう言うが、レイコとタダオは脅えるどころか逆にその目には怒りの炎が灯っていく。

「タダオ、行くわよ」

「うん。くさがつとる場合やないな。ワイもドタマに來たで!!」

剣を振り回しながら近づいて来る「オバケキャンドル」や怪しい炎に包まれている「ナイトウィプス」にタダオは渾身の勢いでブーメランを投げ付ける。

数体はそのまま両断され、何とかかわした数体も腕や、体の一部を失っていて続けてタダオが唱えた“バギ”によって切り裂かれていく。

「ゴースト」や「スカルサーペント」はレイコに襲い掛かるが、レイコは覚えたての“マヌーサ”をさっそく唱えてみる。

霧に包まれた魔物達はその目も虚ろになり、同志討ちを始めた。

レイコはそんな魔物達に“メラ”を放つと魔物達は炎に包まれ灰になっっていく。

残った魔物も既に息は絶え絶えで、茨の鞭の前に倒されていく。

『おお、やっと踊りが止まった』
『体の自由が戻って来たぞ!』

場の魔物達が一掃された為か、踊り続けさせられていた幽霊達はようやく体の自由を取り戻す事が出来た。

『ありがとう、坊やたち。助かったよ』
『本当に苦しかったの。ありがとう、ありがとう』

「安心するのはまだ早いわ。まだボスが残ってるからね」
「あんなヒキウモン、ワイとレイコ姉ちゃんとでイチコロや!」

心配しながら見送ってくれた幽霊達に手を振りながらタダオとレイコは先を進み、再び玉座の間に戻って来た。
親分ゴーストは戻って来た二人を睨み付けるが恐れもせずに睨み返してくる二人相手に正直怯えていた。

『ば、馬鹿め!お前達のような子供が儼に勝てるとも思っているの

か？」

「その子供相手にあんな姑息な罠を使ったのは誰よ？」

「言うとかけどワイらは怒っとんやからな、覚悟せえや！！」

『身の程知らずめ、“ギラ”！！』

「うわっ！！」「きゃあっ！！」

先制攻撃は親分ゴースト、いきなり閃熱呪文^{ギラ}を放って来るがここま
で闘って来た魔物の中にも呪文を使って来た相手はいたのでそれほ
ど慌てずにかわす事が出来た。

逆に親分ゴーストは先制攻撃をかわされた事で動揺し始めた。

魔族は人間よりは強い体と魔力を持つてはいるが、親分ゴースト自
身はそれほど強い訳では無かった。

武器を持っても攻撃力は高くなく、呪文も強力な攻撃呪文は持つて
いなかった。

つまり、親分ゴーストは生者が居ないこの城だからこそボス気取り
の出来たいわゆる「張り子の虎」であったのだ。

そんな彼の一番の武器でもあったギラもあっさりとかわされ、今度
はタダオ達^{タダオ}が呪文攻撃をかけて来た。

「バギ」「メラ」

『ぎゃああーーーーっ！』

タダオのバギに引き裂かれ、レイコのメラに燃やされ、のた打ち回りながら服に燃え移った火を消す為に転げまわる。そんなあまりにも無様すぎる親分ゴーストを見て、二人はただ呆然とするしかなかった。

「……あ、ありや？」

「何なのよコイツ。少し弱すぎるんじゃない？」

『ひいひいひい、助けてくれい。わ、儂が悪かった…勘弁してくれ、許してくれいひいひい！』

親分ゴーストはひいひいと泣き、床に頭を擦り付けながら二人に許しを請うてくる。

二人は顔を見合せながらどうしたらいいのか分からなくなって来た。

何しろ強敵との一大決戦を覚悟してやって来たというのに、呪文を二発当てただけで泣き喚きながら謝って来るのだから。

Level 4「GSレイコ極楽大作戦!!」その2（後書き）

（ゝ・ω・）サブタイトルは前話で言ったようにあくまでもネタでレイコ無双と言っ訳ではありませんでした。続きは今日中にupする予定です。

Level 4「GSレイコ極楽大作戦!!」その3

「と、とにかく！許してほしいのならず、王様達を苦しめている呪いを解きなさい！」

『は、はい！今直ぐに！』

親分ゴーストは両手を上に上げ、何やら聞き慣れない呪文を唱えろと、城の中に漂っていた嫌な感じがゆっくりと薄れて行った。

『これでこの城に浸透させていた儂の魔力は消えました。城の中に残っていた魔物達にも立ち去るように命じておきましたからじきに元の静かな城に戻る筈です。こ、これで許してもらえますね？』

親分ゴーストは相も変わらず土下座をしているが、そんな彼の前にタダ才は立ち、睨みつけながら見降ろす。
くすぶっていた怒りが再燃して来たらしい。

「まだ話は終わってへんで！何でこんな事をしたんや！！」

「そうね、許すか許さないかはその事を聞いてからの話ね」

『はい！話します、話します。実は……』

そして彼は語り始めた。

彼は元々魔界の辺境で小さな集落を作り、魔物や若い魔族達と共に
むらあき
村長として暮らしていた。

そんなある時、今までに無い強力な魔力を持つ大魔王「ミルドラス」が魔界全土を掌握した。魔物達や魔族達はその強力すぎる暗黒魔力の波動を受け、より強力な魔物や魔族へと変貌していった。

だが何故か自分だけは大魔王の影響を受けずにいた。

やがて、集落に住んでいた者達は大魔王に仕える為に村を離れて行く。行かないでくれと頼んでみても見下した目で冷ややかに見返して来るだけで次々と去って行く。

従えていた筈の魔物達も自分よりも強力な力を得て、逆に攻撃を仕掛けてくる始末だ。

同じ様に大魔王の元に行つたとしても下手をしたら魔王軍の一員では無く魔物の一匹として扱われるかもしれない。

彼なりの小さな誇りがそれを許さなかった。

完全に行き場を失つた彼は未だ大魔王の影響下に無い人間界に逃げる事にし、旅の果てに辿り着いたのが此処レヌール城だった。

その後はタダ才達の知っている通り、王様気取りで城に君臨していた訳だ。

「……随分とまあ、身勝手な話ね」

「いくら行く所なくなっただからって、死んだ人苦しめてええわけあるかい!!」

『ひいいっ！ゴメンなさい、ゴメンなさい!』

あまりの身勝手さにレイコとタダオが茨の鞭とブーメランを振り上げた時、扉の方から声が聞こえて来た。

『小さな勇者達、もう其処までにしてあげなさい』

『それ以上は退治では無く虐めじゃ』

その声に二人が振り向いてみると、其処にはレヌール王と王妃が立っていた。

「王様に王妃様、何で止めるの?」

「せやで、コイツのせいで王さまたちは苦しんだんやないんか!!」

怒りが治まらないといった感じの二人に王と王妃はゆっくりと近づいて行き、王はレイコの、王妃はタダオの頭を其々優しく撫ると二人の怒りも徐々に落ち着いていく。

「王様?」

『儂等の為に怒ってくれるのは嬉しいし、正直儂等も此の者の行いは許し難い。だがな小さな勇者達よ、それでも「許す」という強さ

は必要だと僕は思うのじゃ」

『此の者が誤ってしまったのは力と心が弱かったから。此の者をこのまま倒すのは「力」の強さ、しかし私達はあなた達に此の者を許すと言う「心」の強さを持つてほしいのです。その強さはいずれあなた達が大人になった時に正しい道を示してくれるでしょう』

レヌール王と王妃がタダオ達に語りかける言葉を聞きながら、親分ゴーストはその瞳から涙を零していた。

こんなに大きな心を持つ二人に比べて自分は何と小さな存在だったのだろうと。

頭を下げ続けながら涙をボロボロと零す親分ゴーストを見ながら、タダオとレイコもその怒りを霧散させていった。

「もう、悪い事はしないわね？」

「やくそくするんなら許したるで」

『約束します！二度と悪事は働きません、貴方達の心に答える為にも頑張つてやり直してみます！』

「……そんなら仲直りや」

タダオはバツが悪そうにそっぽを向きながらも親分ゴーストに手を差し伸べる。

彼はその手を両手で包み込む様に握り締め、泣きながら何度も「ありがとう、ありがとう」と繰り返し、その体はタダオの手から零れて来る光の粒に包まれていた。

夜明けも間近に迫って来て、親分ゴーストは精神修行の旅に出ると言い、城を立ち去ろうとしていた。

レヌール王と王妃は心を入れ替えたのならこの城に留まって良いと言ったのだが彼は、

「いえ、ワシがこの城に留まっておると貴方様達とはかく、ワシが苦しめていた臣下の方々が安らかに休めぬでしょう。それにワシも世界を見て回りたいのです」

と言い、王やタダオ達も快く見送る事にした。

「おっと、そうじゃ。実は以前、この様な宝玉を見つけたのじゃが」

彼は懷に手を入れて弄ると、手の平大の黄金色に輝く宝玉を取り出した。

「これは王様達の持ち物では無いですかの？」

『いや、我が城に伝わる物では無いな』

王と王妃もその宝玉を眺めて見るが心当たりのある物では無かった。

「ふむ、ではどうするか……。そうじゃ、タダオ殿がもらってはいれまいか？」

「ワイが？」

「うむ。ワシの様な者が持つておるよりもタダオ殿が持つておる方がふさわしいじゃろう」

「……私は？」

「『『』は？』『』』」

「だから私ならどうなのよ？」

「『『』』……』『』』」

四人が四人とも答えに困っていた。

何故ならレイコに渡すと“何故か”明日には道具屋の陳列棚に飾つてある光景しか思い浮かばないのだから。

「……いいわよ、タダオにあげればいいじゃない」

別次元の金欲退魔士とは若干違い、年相応の素直さも持つているレイコ。

意外に大人しく引つ込んだらしい。

「じゃあ、ワシはそろそろ行くでしょう。王様、それに王妃様、色々すみませんでした。タダオ殿にレイコ殿もお元気で」

『うむ、今度こそ道を誤らない様にな』

『新たな道を進み始めた貴方に神の御加護があらん事を』

「今度悪したら何処までも追いかけて行くからね」

「ははは…肝に銘じておきますじゃ」

「じいちゃんも元気でな」

「タダオ殿、ワシの名は「マーリン」と申します。何時か再び出会えた時、貴方のお力になれる様に頑張りますじゃ」

歩き出した親分ゴーストに手を振りながら別れを告げるタダオ。
そんなタダオを振り返りながら彼は眩しいモノを見る様な目で自分の本当の名を告げ、マーリンは笑顔で手を振りながら朝焼けの中に旅立って行った。

「とにかく、これで約束のオバケ退治は終了ね。これで猫ちゃんも……」

そこまで言ったと思ったたらレイコの顔は段々と青くなって行き、ダラダラと汗も滝の様に流れて来た。

「ど、どうしたんやレイコ姉ちゃん？」

「あ、あはは、あはははは……、どうしようタダオ！？　もう朝よ、ママやパパスおじ様達も起きている時間よ」

「しもうたーっ！！　すっかりわすれとったーっ！！」

レイコがそこまで言うのとタダオもようやく理解出来た様で同じ様に青くなり、汗を流しまくる。

『これを使いなさい』

そんな二人にレヌール王が両手を差し出したと思ったら、その手の中には光と共に“キメラの翼”が現れた。

『アルカパの町の教会には私達がお告げと言う形で今回の事を伝えておきます。少しは怒られるかもしれませんがそれ程酷く責められる事は無いでしょう』

「ありがとうございます王妃様！！」

「かんしゃかんげき雨あられや！！」

二人は王妃に抱き着いて涙ながらに感謝をする。

王と王妃もそんな二人の頭を『いいんですよ、助けられたのは私達なのですから』と愛おしそうに撫でながら笑顔で告げる。

「王様ー、王妃様ー！ゆつくりと休んでねー」
「王さまに王妃さまー！バイバイー、おやすみなさいやー！」

タダオとレイコは王と王妃に別れを言いながらキメラの翼を使い、
飛び去って行く。

王と王妃もそんな二人を見送りながら朝の日差しの中に消えて行く。

アルカパへと飛んで行く二人がふと振り返って見ると、暗雲に包まれていたレヌール城はその戒めから解き放たれ、その白亜の姿を取り戻していた。

さて、アルカパに戻った二人だが、王妃の言う通りレヌール城が二人の活躍により解放された事は村中に知れ渡っていて、町の入口にはマミヤとダンカン、そしてパパスが二人の帰りを待っていた。

その足元には例のいじめっ子兄弟が頭に大きめのタンコブを着けて正座をさせられていた。

どうやらこの騒動の大元が彼等だと言う事がばれ、キツイお仕置きを受けた様だ。

その傍に居た猫はタダオの姿を見つけると「コン、コーンツ！」と駆け寄って飛び付くとタダオの顔を舐めまくる。

「わはははは！こら、くすぐったいやないか」

「コンコンコーン♪」

一連の騒動がようやく落ち着き、タダオ達もダンカンの宿屋へと戻っている。

約束通り、猫はタダオ達に渡され今はタダオの膝の上で丸くなっている。
キラーフォックス

「良かったわね、猫ちゃん。さっそく名前を付けてあげなきゃね。えーと、ゲレゲレは「グルルル」…嫌みたいね。じゃあ、意外な所でシロとか「シャアアアー…ツ!!」な、何よ？そんなに嫌がらなくてもいいじゃない」

レイコが色々と名前の候補を上げるがどれも気に入らないらしく中

々決まらず、ウ〜と唸っている彼女（調べてみたらメスだった）をタダオがなだめるとその腕の中でゴロゴロと甘えて玉の様に丸くなる。

そんな彼女を見て思い付いたのか、タダオが「タマモはどうや？いい名前やろ」と、言うとな彼女も気に入ったらしく更にじゃれまくる。

「さてと、名前も決まった事だしそろそろ」

パパスはそう言いながら徐にタダオを抱え上げると膝の上にうつ伏せに乗せ、レイコもまた、同じ様にマミヤの布座の上に寄せられている。

「と、父ちゃん？」

「マ、ママ？…どうしたの？」

膝の上に乗せられた二人はこれから何をされるのか薄々感づいた様で青い顔をしていた。

「お前達のした事は確かに立派だ。…だがしかしっ！夜中に勝手に抜け出し私達に心配かけた事も事実だ。よって」

そこまで言つとパパスとマミヤは自分の子供達のパンツを捲り、お

尻を剥き出しにする。

「ちょ、ちよつとママ、何をするの？やめてー、お尻がタダオに丸見えじゃないー！」

「父ちゃーん、それだけはカンベンや、せめてゲンコツにしてくれやーっ……！」

「二人共いい加減に覚悟を決めなさい」

「其処まで嫌がるからこそ罰になるのだ」

そして、振り上げられたその手は……

「えゝゝん、ゴメンなさいママー！」

「かにんやゝゝ、かにんやゝゝ！」

アルカパの町にパーン、パーンとお尻を叩く音が暫く響いていたとか。

後、ついでにいじめっ子兄弟の家からも……

「冒険の書に記録します」

オマケ

食堂での戦闘が終った後、レイコは魔物達を倒した場所を回りながら宝石を回収して行く。

「ひー、ふー、みー、と。まとめて255G^{ゴールド}ってところね」

「……………」

「どうしたの、タダオ？」

「いや、何やみょーに心の中に引つかかる金額やなあとってな」

そんな事を言うタダオの目は何処か遠い所を眺めている感じだったとか。

オマケ2

「なあ、父ちゃん」

「ん、何だタダオ？」

赤くなったお尻を擦りながらパンツを穿くタダオはパパスに気になる事を聞いてみた。

「その顔の引つかき傷はどうしたんや？」

「ああ、これか。……どうやら名前が気に入らなかった様だな。はは……」

「??？」

《次回予告》

サンタローズに帰って来たワイらやけど相も変わらず寒いままや。そんなある日村で変なイタズラがあちらこちらで起こるんや。そして出会った女の子、妖精？春を呼ぶ？勇者を捜してる？よっしゃ！ワイに任せんかい！

次回Level5「来ない春、イタズラ妖精はメンマが好き」

でも、お尻ペンペンはもうカンベンやで。

Level 4「GSレイコ極楽大作戦!!」その3（後書き）

（・ω・）と言う訳でアルカパレヌール城編終了です。

親分ゴーストは最初はあるまのま魔界に帰ってジャハンナで人間になつての再会を考えていたんですが途中から「このキャラ、勿体ないな」と後のマーリンへとフラグを立てました。

そしてタマモが正式に仲間に、擬人化？当然しますとも、ただし当分先になりますけどね。

次回予告にある様にベラ役は恋姫の「星」にしました。
盗み食いされる物を試しにメンマに変えてみたらビビッ！と来たもので。

パパスさんはいいい加減、諦めましょう。

（・ω・）ノシ ではまた次回。

Level 5「来ない春、イタズラ妖精はメンマが好き」(前書き)

今回は勢いに乗って書いたので丸々一話投稿です。

Level 5「来ない春、イタズラ妖精はメンマが好き」

レイコと共にレヌール城のオバケ退治をして、サンタローズの村に帰って来てから数日が立った。

「ピッ?ピッピィ〜〜ッ!」

「タ、タダオ……、それは……どうしたの?」

「アルカパで友だちになったタマモや。タマモ、この二人はワイの友だちのピエールとスラリンや、仲ようするんやで」

「コンコン」(分かったわ)

サンタローズの家に帰ってさっそく、ピエールとスラリンにタマモを紹介するが二人共タマモを見て怯えている。

まあ、当然であろう。魔物の中では最弱に位置するスライムの前に居るのは……

「タダオ!そ、そいつは魔物だよ!地獄の殺し屋って呼ばれている
キラーフォックスだよ!」

「ピィピィピィ〜〜」

「そうなんか?」

「コン?…コンコン」(え?…うん、そうだけど)

問い掛けられたタマモはそうだよと頷き返す。

「ふ〜ん。で、それがどないしたんや？スラリンたちだって魔物やろ、なら仲間やないか」

「パイ？」

「タダオ……、ぶっ！あはは、そうだよ。僕等は皆タダオの友達なんだった、よろしくねタマモ、僕はスラリン」

「パイパイ……ピエール」

「おっ！ピエール、しゃべれる様になったんか？」

「うん、僕と一緒に言葉の練習をしてるんだ。もっとも、まだ自分の名前だけしか話せないけど」

「！　コ、コンコンコンッ！！」（ちょ、ちょっと私にも教えてよ。私もタダオとお喋りしたい！！）

「勿論だよ、皆で頑張ろう」

「ワイがみんなの言葉がわかればいいんやけどな」

そんなタダオ達の会話を聞きながらパパスとバークは複雑な気持ちでいた。

魔物達と心を通わすタダオ、その姿に嘗てのマーサがどうしても重なるのだから……。

Level 15「来ない春、イタズラ妖精はメンマが大好き」

春は既に訪れている筈で、夏も間近だと言つのにサンタローズ…いや、どの国も未だ冬の寒さの中にあつた。

そんなある日、村のあちこちで妙な事件が頻発した。

事件と言つよりどちらかと言つとイタズラっぽいのだ、もちろんタダオはそんな事はしないと村の皆は解っているが、だからこそ犯人は解らないままであつた。

「坊っちゃん、少しお使いを頼まれてくれませんか？」

「おつかい？ええで」

パパスは朝から調べ物があると部屋に籠りつきりなのでタダオはそんな父の邪魔をしない様に部屋から降りて来るとバークからお使いを頼まれた。

「すみませんね、実はまな板が見当たらないもので捜している最中なんですよ。酒場に頼んでおいたグランバニアの地酒が届いていますので受け取って来ていただけますか」

「りようかいや！いつてきます」

タダオが元気よく飛び出して行くとタマモ達もその後を付いて行く。

暖炉で暖かかった家の中から外に出ると途端に寒くなる。
焚き火で暖を取っている人、震えながらも畑仕事をしてる人、皆この寒さに震えていた。

「いつになったら春が来るのかな？はよ来んな」

「ほんとに変だよな」

「ピー〜」

「コン…コ〜ン」（寒い…タダオ、抱っこ）

「なんや、さむいんかタマモ。甘えんばさんやな」

寒そうに足元に擦り寄って来るタマモをタダオは抱え上げて抱きしめてやる。
そんなタマモをピールとスラリンは羨ましそうに見上げるが仕方が無いと諦めて着いて行く。

スライム族は環境に適応しやすい為、この寒さにもすっかりと慣れているのだ。

「お〜、あつたかさんや」

「コンコン、コ〜ン」（えへへ、タダオもあつたかい）

そんな彼等が酒場のある宿屋に向かっていると其処に見慣れない一人の青年が居た。

紫色のマントを身に付け、長い黒髪は根元で纏め、頭には赤いバンダナを付けていた。

青年はタダオを見つけると優しく微笑みながら近づくとしゃがみ込み目の高さを同じにする。

「よっ！坊主、今日は」

「こ、こんにちはや…」

「そのキラーフォックスやスライム達は坊主の友達か」

「そ、そうやで！タマモたちはワイの友だちや、わるい魔物やないで！」

「ははは、安心せい。こんなに綺麗な眼をしてるんだ。悪い魔物じゃない事は一目で解るさ」

青年はそう笑いながらタダオの腕に抱かれているタマモの頭を撫でてやり、タマモも別に抵抗せずに大人しく撫でられている。

「コ、コン？」（何故だろ、この人タダオと同じ匂いがする？）

「ピイ？」

（この人の目、タダオとそっくり……。いや、全く同じだ。何で？）

タマモ達も目の前の青年の違和感に…否、“違和感の無さ”に驚い

ていた。

そしてタダオを見るその目の寂しさ、そして哀しさにも。

青年はタダオの腰にある道具袋を見ると笑いながら語りかける。

「坊主、何か綺麗な宝玉を持つとるな」

「何や、これはダメやで！……兄ちゃんひよつとしてドロボウか？」

「わはははは！そんな訳あるかい。俺も同じ様な宝玉を持つとるかな、ほれ」

タダオは袋を隠すようにしながらゆっくりと後ずさっていくが青年は自分の袋から黄金色に輝く宝玉を取り出した。

「わ、ホンマや。ワイのと同じでキレイやな」

そう言いながらタダオは袋から自分の宝玉を取り出す。

並べて見比べようとすると青年の宝玉が日の光を受けて光り、タダオ達は目を眩ませ一瞬目を閉じた。

「大丈夫か坊主？」

「う、うん、へいきや」

青年は立ち上がりながら宝玉を自分の袋にしまい込み、タダオも自分の袋に入れた。

青年はそんなタダオの頭に手を乗せ、少し乱暴に撫で付ける。

「わ、わっ！なんや兄ちゃん、ちよつと痛いぞ」

「男ならそれ位の事、我慢せんかい！……坊主、父ちゃん好きか？」

「当たり前やないかい！ワイの父ちゃんは世界一の父ちゃんや！」

「そうか……、だったらその父ちゃんに誇れる男になれ！負けるな！挫けるな！前に進め！……いいな」

「お、おう。分かったぞ、兄ちゃん！」

タダオはそう叫び、青年が差し出していた拳に自分の拳をぶつける。青年はそんなタダオを見て優しそうに、そしてやはり哀しそうに微笑んだ。

「さ、お使いの途中だろ、早く行きな」

「そうやった！じゃあ、あんがとな兄ちゃん！」

青年に背を向け駆け出すタダオ、その後をタマモ達が付いて行く。ふと、タマモが青年を振り向いてみると……

「まだまだガキのタダオを頼むな、『タマモ、ピエール、スラリン』」

そう小さな声で呟っていた。

「コン？コンコンコン」（あれ？ねえ、アイツに私達の名前教えたっけ）

「パイ？パイパイ」

「村の人達に聞いてたんじゃないかな？（でも何であんなに何もかもがタダオと同じだったんだろう？）」

歩き続けていると宿屋の近くの民家の前で女性が何かを捜している感じでウロウロしていた。

「おばちゃん、どうかしたんか？」

「ああ、タダオくんかい。いえね、仕舞ってあったメンマの壺が無くなっていて代わりにG^{ゴールド}が置いてあったんだよ。おじいさんが何時もみたいに摘み食いしたのかと思ったけどさすがにあの量は食べら

れないしね、せつかく食べ頃だったのに」

女性がそんな風に溜息を吐いていると家の奥から「ワシヤ、摘み食いなどしておらぬと言つておるのに」とおじいさんの呟きが聞こえて来た。

「じゃあ、ワイおつかいの途中やからもう行くな」
「じゃあね、タダオくん」

酒場は宿屋の地下にあり、タダオは挨拶をしながら入って来る。魔物のタマモ達はこの村ではすっかり顔馴染みの為、今更怖がる面々は居らず他所の旅人が居ない限りはタダオに着いて来ても文句は出なかった。

「おや、タダオくんどうしたんだい？」
「おつかいに来たんや、酒場におりるな」
「立派だな、タダオくんは。それに比べて、ブツブツ……」
「どうかしたんか、おっちゃん？」
「ああ、誰か宿帳に落書きしている奴が居てね、昨日も誰も泊まっていない筈なのに宿帳の名簿に「セイ」と書かれてるんだ。妙な事ゴルトにGまで置かれていてね。何だか気味が悪いよ」
「そうなんか。変ないたずらっ子やな」

受付の親父に手を振り、タダオは酒場のある地下へと降りて行く。
まだ昼間の為、さすがに客は居らず酒場のマスターは準備に追われているのかあくせくと動き回っていた。

「マスター、おつかいに來たで。父ちゃんのお酒をちょうだいや」
「おお、いらつしゃいタダオくん。それがね、どう言う訳かパパスさんに頼まれたお酒が見当たらないんだよ。カウンターの上に置いておいた筈なのに無くなってるんだよ、代わりにG^{ゴールド}が置かれてるし」

そしてマスターは「そのくせ微妙に足りないんだよな」などとぶつぶつ言いながらカウンターの下や調理場などを捜し回っているがなかなか見つからないらしい。

タダオはカウンターに寄り掛かりながらマスターがお酒を見つけるのを待っていると、何やらポリポリという音と、グビグビを飲み物を飲む音が聞こえて來たので振り向いてみると、客席でテーブルに置いた壺からメンマを食べながらコップにお酒を注ぎ、飲み干して行く半透明の女性が居た。

何と言うか、見た目14〜5歳の少女が醸し出す雰囲気では無く、現実世界であればすぐさまお縄頂戴であろう。

「うむ！このメンマの絶妙な漬かり具合、さぞかし名のある人物の手によるものであるう。更にこのグランバニアの地酒！喉越しの爽やかさ、清々しい香り、身体全体に行きわたるまるやかな味。ああ、何と素晴らしきコラボレーション！！」

「……、なあ姉ちゃん、何しとるんや？それにそのお酒、ひよっとしてワイの父ちゃんのお酒やないんか？」

「うおうつ！な、何と！坊やは私の姿が見えるのか？」

半透明の女性：否、少女は突然声をかけられ驚き、その声の主を見ると魔物を連れた少年である事にまた驚いた。

「まる見えや、でも何かレヌール城の王さま達みたいに透きとおってるな。姉ちゃんも幽霊さんか？」

「いや、違うぞ。私は妖精の村の長「シオン」様に仕える妖精族の戦士「セイ」だ」

「ワイはタダオ、そしてワイの友だちのタマモにピエールとスラリンや」

「おお、魔物と分け隔てなく友達になれるとは、タダオ殿は中々の御仁ですな」

「で、その戦士さまが何でドロボウさんなんかしてるんや？あつ！ひよっとしてさいきん村の中でイタズラしてるのは姉ちゃんやな」

「ち、違うぞ、あれはイタズラでは無い。我等妖精族は人間族には見えづらいらしくてな、こうやって私の存在を知ってもらおうとしてたんだ。断じてイタズラでは無いぞ。ちゃんとGも^{「ゴール」}払ってあるし」

「でもこのお酒、父ちゃんが楽しみにしてたんやけどな」

タダオはすっかりと空になってしまった酒瓶を寂しそうに抱える。

「ぐっ…そ、それは申し訳ない。そうだ、それよりもこうして知り合えたのも何かの縁、私の話を聞いてはくれまいか？」

「べつにええけど」

「かたじけない！では…、たしか村の端に地下室がある家があったな」

「ワイの家や」

「おお、丁度いい。タダオ殿達はその地下室で待っていてくれ、私もすぐに行く」

「わかったで、はよ来てな。マスター、ワイ帰るな」

タダオは空き瓶をテーブルに置くとマスターに挨拶をして酒場を後にした。

「ああ、すまないねタダオくん。私はもう少し捜してみるよ」

『すまぬな、マスターよ。これは少ないが追加の代金だ』

セイもそう言っゴルドてGをカウンターの上に置き、店を出て行った。

「ありや？またGゴルドが置いてある。何なんだ一体？」

タダオが家に帰ろうと教会の前を通りかかるとシスターが何やら赤い顔をして話しかけて来る。

「タダオくん、先ほどこの前で男の人と話をされてましたが一体あなたの方はどなたですか？」

「さあ？ワイも見た事ない兄ちゃんやったからな。だれかは分からないで」

「そうですか、お話がしたかったんですが何処に行かれたのでしょうか？」

シスターと別れて家に着くとバークにお酒が見つからないでいると伝えた。

「そうですか、本当に最近は妙な事が続きますね。でも幸いに先ほど旦那様にお客様が来て、お土産にと頼んでいた物と同じグランバニアの地酒を持って来て下さったので左程急ぎませんよ。マスターには後で私が伝えておきましょう」

「そのお客さんってまだおるんか？」

「いえ、坊っちゃんまが帰って来る少し前にお帰りになりました。でもどうかしたのでしょうかね、凄く寂しそうで哀しそうな顔をしてらっしゃいました」

そんなバークの言葉を聞きながらスラリンはさつき出会った青年の事を思い返していた。

（もしかしてさっきのあの人のかな？あの人の目も凄く寂しそう
で哀しそうだった。誰なんだろう？）

「バーク、ワイちよつと地下室におるな」

「地下室ですか？寒いですから風邪を引かない様に気を付けて下さいね」

「だいじょうぶや、タマモを抱いとればあつたかやからな」

タダオはタマモを抱き抱えるとスリスリと頬擦りをする。

タマモは行き成りの事に少し驚いたが、それでも嬉しそうに自分もタダオに頬擦りをし返す。

「コ、コンコンコン」（もう、タダオったら。えへへ）

地下室に降りると何時の間にも先回りしたのか既にセイがタダオ達を待っていた。

「なんや、姉ちゃんえらい早いな」

「はっはっはっ、これ位の事朝飯前よ。ではタダ才殿よ、これから我等の妖精界に来て下され。詳しい話は其処でいたしましょう」

「でもな、かつてにどこかに行くと言わんと父ちゃんに怒られるんや。そしてまたお尻ペンペンや」

「それでしたら心配は要りませぬ。ゝ@*#\$+ゝ」

セイが妖精の言葉なのか、聞き慣れない呪文を唱えると何処からともなく光の階段が降りて来た。

「この“妖精の道”を通れば人間界と妖精界の時間の差は無くなります。つまり妖精界でどれだけ時間を過ごしても今と同じ時間に人間界に帰って来れます」

「そっか、なら安心やな。じゃあ、みんなで行こか」

「コンコン」（うん、行こう）

「ピッピイー！」

「うん、今度は僕も着いて行くよ」

そうしてタダ才達はセイの後を追って、光の階段を昇って行った。其処でタダ才はまた新たな闘いに身を投じる事となる。

妖精の国に、そして世界に春を呼び戻す為に。

「冒険の書に記録します」

《次回予告》

セイ姉ちゃん連れられてワイは妖精の村にやって来たんや。

そこで村を収めているシオンさまに会って事情を聞いたんやけど、何でも春を呼ぶフルートが盗まれたらしいんや。

そんなん、イタズラじゃすまされんで。そんな奴はワイがお仕置きしたる！

でも、寒いな。何かええ服ないんかな？

次回Level 6「取り戻せ！春風のフルート。タダオの装備は“ぬいぐるみ”！！」

ワイは男の子やで、こんなん恥ずかしいわ！

Level 15「来ない春、イタズラ妖精はメンマが好き」(後書き)

(、・ω・) セイの服装は恋姫？無双と同じです。無理に変更しても何ですしね。

後、タマモのセリフには同時通訳を入れてます。ピエール？…彼はいいでしょう。(オイ

セイに無銭飲食などをさせるのも何ですし、一応Gを置いておく事にしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2139y/>

ドラゴンクエスト?～紡がれし三つの刻（とき）～

2011年12月1日15時50分発行